２０２０年度（２０２０年3月～２０２１年3月）
気になった新書のコメントと私の挨拶

２０２1年3月吉日

衣袋洋一

大変な状況の中、いかがお過ごしでしょうか！！？？

皆様と同様、私も自分、家族のことを考え自粛生活をしています。

２０２０年度より会費制から「けんけんふるさと寄付」に変更しました。不安がありましたが、多額の振り込みがあり、皆様の支えをひしひしと感じました。貴重なるご厚意の寄付は、澤田研究室、建築研究会、そして建築研究会ＯＢ会の維持・発展に使わせていただきます。本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

冒頭、昨年も同じことを書いていた。まさか1年以上、状況が回復せず、収束しないとは誰も考えていなかったと思います。自然の恐ろしさ、無知というものをつくづく感じされてしまった。

先日も東日本大震災の余震、最大震度6強が福島県沖で発生しました。ＳＡＲＳも約１０年前である。災害は忘れた時にやってくると言われる。茶化すような言い方は良くないが、災害等のＳＤＧｓだろうか。

新たな生活、働き型、生き方等々の模索がまだまだ続くだろう。お互い気落ちすることなく、前向きに、ひとつひとつ自分で導きだし、新たな自分、家族、生き方等のあり方を見つけてほしいと思っています。

早朝、私の住んでいる１４階から、穏やかに、どっしりとそびえている富士山が見えます。なんと美しい風景だろうか。なんか元気をもらいます。私も自分のＳＤＧｓを探そうと思っています。お互い元気を出して、少し頑張ろう。

自分の家にいる時間が長くなり、書店に向かう回数も増え、読んでいる新書の数もおのずから増えている。早朝の1時間、テレビを見ながら、ソファーに横になりながら・・。

タイトル、内容は「今的」なものが多くなっている。やはり現状が気になるのだろう。知識を吸収するのではなく、与えられた項目、内容に対して、自分の考え方を、その都度対話し、既存の知識と入れ替え、自己更新をはかっている。つまり、私にとっての新書を読むことで知識の集積を図るのではなく、古くなった知識の入替作業を行うものと思っています。新書は、新しく知識を書き換えるテキストだと思います。

以下に、私のこの1年間、読み、気になった新書の読書感を記載します。

いつかお会いしたいときにお話をしましょう。会いたいですね！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・世界のニュースを日本人は何も知らない：谷本真由美・ワニブックスＰＬＵＳ新書

情報の入手問題が基本であろう。じっくり吟味するアナログ情報（新聞、書籍等々）を読まれず、視覚、音声からのダイレクトな情報であるスマートフォン、ＴＶ（各放送局は各新聞とリンクしている）が中心になっている。ＳＮＳに流される情報を鵜呑みにし、拡散させてしまう結果となる。目の前の本棚に「インターネットは空っぽの洞窟」がある。「空っぽ」にも意味はあるが、「洞窟」という言葉にもっと深い意味があると考える。

じっくり、基本、基礎を大切に成長、進化させることで、じわじわ進んでいく時代への恐怖に立ち向かえる。著者の語り口、情報発信に違和感を覚えるが、言っていることにも一理あると感じた。

・ＡＩ ｖｓ．民主主義 ― 高度化する世論操作の深層：ＮＨＫ取材班・ＮＨＫ出版新書６１４

今流行のＡＩと崩壊しつつある後者の言葉。興味ある二つのタイトルが目に付いた。最初にアメリカ大統領選挙・トランプの話。ＡＩ（ＧＡＦＡ等が行っているマーケティング手法）による情報、世論操作。

途中、「**文藝春秋・総力特集コロナ戦争**」を読む。

「民主主義が機能するためには、自分以外のことまで考えられなければならない。そして、そのためには、我々が共同生活をしているこの世界についての全体像を共有していることが必要」。しかし、現実には、駄々洩れの個人情報を対象としているＡＩによって個別に仕分け・操作されるようになった。改めてＳＮＳ等の怖さを感じた。私はやらないときめている。

「文化戦争」という言葉が出てきた。「政治は文化の下流に存在し、政治は自然にそこから流れ出す」。いつの時代も同じことかもしれない。個人がどのように生きていくかのビジョンの問題かもしれない。そして、「マイクロターゲティング」、私にも心当たりはある。気を付けよう！！

現実のＳＮＳ、ＡＩ等を知るためには読んでみてはいかがですか！！

・新実存主義：マルクス・ガブリエル・岩波新書１８２２

著者の新書は数冊読んだ。語っている対象そのものは簡単そうであるが難しかった。ＮＨＫで放送された録画を見、挑戦してみよう。私の血気盛んの時はサルトルの「実存主義」であった。彼が唱えている「心（心的語彙）」（純粋に物理的な世界や動物界のほかのメンバーから人間が自分を区別しようとするのに由来する）が気になる。ＡＩ、デジタル社会・世界であるがゆえに再考する必要がある。他の人のものを読むと混乱するので、マルクス・ガブリエルの章のみ読む。現在、目には見えない新型コロナウイルスが「心」に及ぼしている「今」だから。しんどそう！！ ちょっと難しかった。でも挑戦する価値はある。

・営業はいらない：三戸政和・ＳＢ新書５０３

私にはもっとも関係ない分野。でも読み方、視点、解釈の仕方を変えれば自己更新、思考のイ

ノベーション、リノベーションを導き出す。直喩的なものより暗喩的なものが新たな意味等を生み出すのと同じ。私と最も遠い分野に興味ある。新型コロナウイルスが、大きく生活、組織、方法論等々の変化を促し、更新(変化ではない)を強制するだろう。新しい生活、生き方、価値基準の展開を。

・江戸とアバダー ― 私たちの内なるダイバーシティ：

池上英子、田中優子・朝日新聞出版７５７

テレビ等に出演していた田中優子（法政大学総長）の江戸時代研究に興味があった。戦国、統一、統轄を経ての江戸時代の「文化」「芸能」に。本書の内容を表している文書を見つけた。池上の「個人とは、複数のアバターのネットワークの集合体」である。現代の情報化社会における自分の在り方、アイデンティティ・自分探しに興味ある人は読む価値はある。アバダー＝分身主義は欧米的アイデンティティ・玉葱主義＝自分探しよりは気が楽になるかも。

・教養として学んでおきたい落語：堀井憲一郎・マイナビ新書

新書を探しに書店に行った。前書の影響が残っていたのだろう。落語は「いま」と「馬鹿」の話だそうだ。江戸時代に生まれたものだが「いま」は生きている。

新型コロナウイルスで「見直し」が叫ばれているご時世。古いシステムの世界である落語界。否定するのはたやすいが・・・。

・マルクス・ガブリエル欲望の時代を哲学するⅡ ― 自由と闘争のパラドックスを超えて：

丸山俊一＋ＮＨＫ「欲望の時代の哲学」制作班・ＮＨＫ出版新書６２０

以前読んだ同題名の続編。気になる人間である。新型コロナウイルス状況の中で、私はどのような読み方をするのだろうか。対象の新書等を選択し、読むときの自分の心境とすり合わせて見ると、違った捉え方をするかも。「欲望」と目に見えない・・・・！！

「人はみな、本来、自由の感覚、意思を持っています。ところが、現代の哲学、科学、テクノロジー、そして経済が人々の自由に影響を与え、自ら欲望の奴隷と化したという議論があります。私たち人間は自由です。自らがもたらした不自由の呪縛から、脱出せねばなりません」。著者の冒頭の言葉です。**「新実在論」とは、社会を単純化できない複雑な関係性として理解する視座、と定義している。**全ての状況を意味あるものにするためには「再配置」すること。様々な状況における自分の立ち位置から見れば、前書（江戸とアバダー）の「様々なコミュニティの総合としてのアバダー」とも言えるかも。

最後に、「お金は、さまざまな見かたの調整のための媒体」と述べ、かつ、思考とは私の感覚器官の能力を働かせる行為（真偽を問わない）。その意味で、思考とは、考えを把握すること。「新実在論」の本質をではないかと感じた。

ＮＨＫで放映した内容であり、「実在」するところからの展開(哲学する)です。難しい新書ではあるが、ネットワーク、コミュニティとしての「アバダー」として一読することを進める。

※「概念（Concept）」という言葉は、ラテン語で「一緒に把握すること」を意味する。自己主張することではない。←重要

・バンクシー ― アート・テロリスト：毛利嘉孝・光文社新書

興味ある路上アーティスト。何が語られるのか！！　彼自身を知るために読む！

現在日本各地で個展が開かれている。でも、彼の作品を一堂に会して個展を開く意味があるのだろうか？　場所と状況の作品！！　でもバンクシー及び「チーム・バンクシー」を知るための入門書としては良かった。

※今、８月下旬から９月上旬。書店には「新型コロナウイルス、感染症、決断力、リーダー論・・・」等々、状況を鑑み、「商売の新書」があふれている。ひとまず時間を空けてみる。この間、文藝春秋・芥川賞受賞作品、久しぶりの村上春樹「一人称単数」を読む。

・フィンランド人はなぜ午後４時に仕事が終わるのか：堀内時喜子・ポプラ新書１Ｂ２

新型コロナウイルスから日本人は何を学び、新たな生活を模索したのか？　依然として、政権が変わるときのアンケート等からは「経済成長」を求める声が多い。特に若者において。君たちが学んでいる「ＳＤＧｓ」は何なのだろうか？何を「持続可能」とするのかが問われたのではないだろうか。「いのち」「生活」「家族」・・・、自分の身近な生き方、在り方が問われたのではないだろうか。右肩上がりの成長ではなく、「普通の生活」の重要性ではなかったのか！！日本人の悪い思考方法「のど元過ぎれば・・・」がもたげてきた。

まだ新型コロナウイルスのワクチン等々が生まれず、少々小康状態の時に。

そのような気持ちで本新書を手に取る。世界でも「幸福度」が高い彼らの働き方改革、ライフスタイル＆ワークスタイルバランスを垣間見てみたい！！　読み終わった時の気持ちはどうなのだろうか！！やはり甘くはなかった。日本でいう「自助」、まず自ら努力をし、自らの道を拓けという「シン」という生き方がある。ヒョウンなことから菅内閣が生まれ「自助・共助・公助」がキャッチフレーズ。本質的に「シン」とは異なる。自らがたどってきた「道」（ＮＨＫ『おしん』）が日本人の「何か」をくすぐり、共感を呼んでいる。状況が追い込まれた時、負的要因に頼るのではなく、基礎、ベースをきっちりと固め、再構築する必要がある。フィンランドは長い時間をかけて創り出してきた文化、生き方、解決方法があった。今の日本には焦りが蔓延しているようだ！！　今こそ本当の「ゆとり」を見直し、地盤を固める必要がある。スーッと入る内容ではあるが、今の日本が考えさせる問題が充満している。一読することを進める。

・マルクス・ガブリエル危機の時代を語る：

丸山俊一＋ＮＨＫ〔欲望の時代の哲学〕制作班・ＮＨＫ出版新書６３５

またまたおなじみの登場です。前回の続きの内容。前言を翻して「流行」に乗り購入。多分、

私自身が何かを求めているのだろう。早急に解決はできないだろうが、地道に模索し、冷静に振り返り、基本を見つめる機会を探している状況であるのかもしれない。「実在」とは。「実在主義」とは。「働き型」の変化と「普通」を求め、拠点としての「組織」「会社」に対して以上に、「住まい型」「すまいかた」の場所、内容が変化する。今後、組織、企業等の場所は縮小し、「住まい」の内容と位置が大きく変化するだろう。前新書のような「住まい型」が。真剣に「すまう」ことを考え、それに従った「住居」「すまい」が大きなテーマになると感じた。建築のテーマは、人々が集まってデータ的処理をするほとんどの「資本主義的集団」のための量的な機能、場、空間、施設ではなく、「働き型」と「住まい型」の大きな変化により、人間的、質的な人々の「集団」に大きく変わる時代になるのではないだろうか。「集合」の在り方と個と集団との関係とその「距離」。「住まい型」の変化は、「組織」「集団」の本質的変化をもたらし、「日常」「普通」の在り方へと建築テーマが大きく変化するのでは。ある意味での「非生産的場」である「生活・すまいの場」として。

気になった文章があった。現在のＡＩは、人間がたどってきた、過去のパターンの「体系化」であり、パターンの「認識」（意識と知識による視点の多様性の存在）ではないという言葉。さらに、「人間社会に意味をもたらす方向性を生み出したときに、うまくいく。それを『センスメイキング』（人間の世界を理解し、人間にとって何が重要か、何が意味あるものかを理解する能力）と呼ぶ」である。ＡＩの本質！！　ビックデータではなく「厚いデータ」。

振りかえって考えると、以前良く読んだ「山口昌男」の本があった。今でも、私にとって大事な本、著者として本棚の一部を占めている。中心ではなく周辺、神話・・・。物語の重要性！！「新たな生活・場」を生み出す必要のものがあるはずだ。今の時代、今の状況に最も必要な・・・

・何のために本を読むのか ― 新しい時代に自分と世界をとらえ直すヒント ：斉藤孝・青春新書

「青春」（若者向けの著書が多い）をテーマとする著者の新書を手にするのは、新型コロナウイルスに少々自分が疲れているからだろうか？　閉塞感を感じているのだろうか？　そうなんだ！！　若くなったつもりで「教養」高めるために読んでいこう！！　いつも思考は新鮮でありたい！！　と気づくことが多い。

本のタイトルへの回答。自分が購入した理由。基本的なことであるが、過去を知り、現状を把握し、将来（近未来）を思考するためにも、手に取り一読し、気になった書籍（気軽に手に取れる新書、文庫で良い）があったら、ちょっと深く読めばよい！！　と納得させている。

・楽しい知識 ― 僕らの天皇（憲法）・汝の隣人・コロナの時代：高橋源一郎・朝日新書７８２

著者の本を単独で読むのは初めてかもしれない。ユニークな教員が多い明治学院大学の教員だった（宇波彰も務めていた）。知識、学ぶこと等の基本。出だしで扱っている内容がショックであった。さらに、「気になる」というフレーズ！！　自分の知識を再確認することは大切なことだろう。特に思い込みが激しい私にとっては！！　君たちは、どうかな！？

人間・あいだ↓「あいだ」が気になる。「人」と「人」のあいだ。観察者＝自分と「実在」と

の「あいだ」→感覚→「新実在主義」（マルクス・ガブリエル）。強引につなげることが得意な私。演繹法ではなく帰納法の思考方法。新書を乱読、多読する屁理屈！！

・人新世の「資本論」：斉藤幸平・集英社新書

世の中は新型コロナウイルスの第３波。ＧｏＴｏ・・・で動いても良いという雰囲気になり、経済を動かそうとしている。が新型コロナウイルスも帯同する。「二兎を追うものは一兎も得ず」「急がば回れ」ということわざは、社会、時代によって変わるものだろうか。緩め、経済活動を促した結果、欧米がとんでもないことになっている。それでも日本は・・オリンピック開催のために。

タイトルに興味を持ち、目次を見て購入。サー読むぞ！！（現在、新書のベストセラー：人々は何かを求めているのだろうか！！？　変化を！！）

「コモン」、『「持続可能性」と「社会的平等」は密接な関係性がある』！！『マルクスのエコロジー思想』！！「経済成長しない循環型の定常型経済（環境用語！！）」

第６、７章を読むと、現菅政権の「自助」矢印「公助」（＝新自由主義！！）という序列の問題に気づく。自助と公助は序列ではなくセット（私たちは解決に向けて、本方針で行いますので、共に個人努力をしてください。全体と個は常に序列ありではなく、真のフラット関係でなければならない。ある意味のコモン、持続可能性）ではないだろうか。コロナ問題が出現し、何が問題なのかがクリアになってきた。かなり前に読んだ『「公益」資本主義』「個人を幸福にしない日本の組織」及び最近読んだ「フィンランド人はなぜ午後４時に仕事が終わるのか」が頭をよぎった。第３波新型コロナウイルスの状況にあって（２０２０・１２・１２）、日本の政治家は、一見全体を考えているようなそぶりをしながら、自分の間違った、偏った信念を通すのが「正義」「政治」だと思っている。その様な人に限って、「ダイバーシティ・多様性」等を語る。自分にとって都合のよい、言い回しのみであって、「全体」と「個」の相互交流の柔軟性を失ってしまっている。

甘かった、考えさせる問題が多すぎる！！　難しい問題ではあり、理解できないかもしれないが、でも、何かを得るために、自己更新をはかるために読み切る必要がある！！

・同調圧力 ― 日本社会はなぜ息苦しいのか：鴻上尚文・佐藤直樹・講談社現代新書２５７９

今日的テーマで買わないでいたが購入。やはり流行に乗っているのかな。新書の宿命。冒頭で言われる「戦時下の日本と同じではないか」に対して、今回の状況は少々違うのではないかと感じる。「世間」「社会」と「インディビジュアル・個人」の関係は重要な問題だと思う。新型コロナウイルスが浮き彫りにしたような気がする。自粛にもかかわらず、若者の動きが激しい。「世間」「社会」の中における「インディビジュアル」がＳＮＳと同じように無名性だからであろう。真の「インディビジュアル」ではないと思う。先日のテレビで「ネアンデルタール」と「ホモサピエンス」の違いを放映していた。何故「ホモサピエンス」が生き延びたかである。「インディビジュアル」と「社会」＝「組織・集団」との関係が重要なファクターになったそう

です。「世間」は後ろ向き、「社会」は前向き！！　でも、前向きな世間もあるのでは。前向きな世間を探してみることも良いだろう。「世間」「社会」「自粛」「忖度」「自己責任」等々について若干わかったような気がする。一度読んでみては！！　「世間」と「社会」にいる自分についても考えされる！！

・現代語訳　論語と算盤：渋沢栄一、守屋淳訳・ちくま新書

前から気になっていた新書(実はすでに購入済であった。よくあること)。「実業」「資本主義」の暴走に歯止めをかける「論語」の適応、「近代日本の設計者の一人」である渋沢栄一を知りたいという気持ちになり、ようやく手に取った。コロナ時世なのだろうか！！　社会、地域、コミュニティ、人々が疲弊しているのだろう。グローバリズムとローカリズム、右肩上がりの経済、新自由主義経済又は新たな生活スタイルか。多分に、人々は、戦後輸入されてきた欧米型の生活、仕事等に疲れてきたのかもしれない。本書のタイトルの「真逆」に、何かを求めたのかもしれない。本書が売れている！！ある意味での組織、企業等からの「同調圧力」に対しての生き方。前新書と兼ね合いながら読むと良いかも。書棚を見ると以前「論語」(**超訳・論語・自分を磨く２００の言葉：岬龍一郎：ＰＨＰ文庫**)を読んでいた。その時、私は何を求めていたのか！！？今、知りたい。疲れていたのかな！！一度読んでみるといいかも！！？

・絵で分かる人工知能 ― 明日使いたくなるキーワード６８：

三宅陽一郎・森川幸人・ＳＢクリエティブ

自己確認のために購入。世間で言われているＡＩ：人工知能に関する言語、意味、機能等々を集約した「辞書」「解説書」。興味ある事項を拾い読みしても良い。それをベースに、色々な人が語る「人工知能と今後」等が書かれている新書を読んでみても良いだろう。**回答は自分で出すものです！！**

・でたらめの科学 ― サイコロから量子コンピューターまで：勝田敏彦・朝日新聞出版

相反する「でたらめ」と「科学」が気に入り「いいかげん」な気持ちで購入。「でたらめ」の根拠が面白かった。納得しているので、感想文が少ない。自分なりに、感想文の長短が面白い！！

・なぜジャーナリズムは崩壊したのか：望月衣塑子・佐高信・講談社＋α新書

政治と批評、ジャーナリズムの関係が国及び国民の民主主義、政治とのかかわり、尺度として判断できる。民主主義は崩壊したとも言われる現在。ある政治家が新型コロナウイルス感染において「日本人は民度が高い」と言っていたが本当だろうか！！　新聞を読まない、政治を語らない世代、若者が増えたような気がする。ＴＶもチャンネルによってテーマ、内容、解説が異なる。本書を読むと、すべての分野で、特に政治への忖度が蔓延しているような気がする。特に、中立であるべき官僚のデータ、文書等々の改ざん、答弁等々はひどすぎる。忖度は法律の基本であるべき国民に向けるべきだろう。「個人を幸福にしない日本の組織」「同調圧力」がよみ

がえる。本書の出版が２０２０年７月。今、２０２１年1月中旬、生々しく、空恐ろしい状況が「現実」を照らしている。

・トヨタ　チーフエンジニアの仕事：北川尚人・講談社＋α新書

新たな企画をどう立てるか、その際の組織の在り方、進捗の仕方、シミュレーション等々、今流にいうと「Ｆａｃｔ」をもって書き記している。現場の強さ。さらっと読めるのでお勧めです。なつかしい「システム工学思考」でした。イノベーション（改革、革命等々）か、リノベーション（改変、修景修復等々）か？　私の「システム工学・思考」も、３０数年が経ち、変革（イノベーションか？リノベーションか？）する時期に来たのかもしれない。

・自分の頭で考える日本の論点：出口治明・ＧＳ幻冬舎新書

「論点：日本の新型コロナウイルス対応は適切だったか」が象徴している。

３．１１東日本大震災の安全神話、危機への対策の甘さ等による予算削減、対応不足。今回も同じことではないでしょうか。「自分で考える」ということは、今起こったことを考えることも大事であるが、常、過去に起こった事象、歴史と照らし合わせ、「現在」「現実」にそった問題として捉えていく必要がある。著者が言う「タテ（歴史）・ヨコ（世界）・算数（数値・事実・論理）」。特に危機管理は「・・・に対処する、備えておく」ことであり、「ヨコ」が基本である。「考える」ことの基本も「ヨコ」ではないか。

日々、毎日、常に起こっている事象（モノ・コト）に対して、自分に問いかけ、自分なりの結論＝意見を準備しておくことが大事。自分史の構築でもある。

何処の項目から読んでも良い。興味があるところから読み、対面し、自分の思考ルール、方法に従って意見をまとめるテキストです。最終章の「付録」は自己更新の参考になるかも？　取り入れるのは自由。でも、自己の思考・方法を見直すには参考になる。

・空間は実在するか：橋元淳一郎・インターナショナル新書０６３

他分野の人がいる、あるゼミで「建築の空間」と発言をしたことがある。「建築における空間」とはどのような意味、現象を言うのですか、という質問を受けた。建築に携わる人のいい加減さを悟った。再確認のために購入。情報の視覚化、ファクトでもあるだろう。

難しかった。でもミンコフスキー空間(時間と空間を同列にする→虚数)が一つの財産になった。興味のある人は読んでください。

※この間、数冊の新書を購入したが失敗した。「はじめに」「目次」「あとがき」をしっかり確かめてから購入すべきだった！！

新書と言っている以上、電車の中、ソファーの上、ちょっとした時間でも気楽に読め、自己更新が図られることが一義的でなければならない。

最近、同じようなテーマ、内容なので、身の丈を考えず、ちょっと難しい新書を

選びすぎかも！！　でも許してやろう。自己更新！！

・勉強の価値：森博嗣・幻冬舎新書６０７

著者の小説ではなくエッセイのほうを読む機会が多くなってきた。特に、新型コロナウイルス禍の現在、著者の発言は皮肉的であり、面白いからだろう。現状の日本の教育問題が取り上げられているから。「継続すること」「基礎を構築すること」が抜け落ちた日本。それが教育に現れている日本。軽いエッセイであるが、意味深く、今でも参考になり、学ぶことが多い。

「環境」が人を創る。アフォーダンス！！（最近では出てこなくなった謙虚な言葉。語られなくなった。ＳＤＧｓそのものであり、原点では）。ＳＤＧｓ言葉だけが蔓延している。新語に惑うことなく、原点に戻るべき。大きな意味としての「歴史」と「継続する意思」に学ぶべき。

・自由の限界：著者多数・中公新書ラクレ７１５

色々な世界的著名人が語っている。視点が様々であり、論点が異なる。政界情勢の今昔を知るのには良いのではないでしょうか。どこから読んでも良い点は新書的である。

・Ｚ世代 ― 若者はなぜインスタ・ＴｉｋＴｏｋにはまるのか？：原田曜平・光文社新書

この世代は「ゆとり世代」（１９８７年から２００５年）と重なる。概ね１９９０年代中盤又は２０００年代序盤以降に生まれた世代（失われた１０年、２０年世代）、２５歳以下が「Ｚ世代」。私から言わせれば、「ゆとり」の真の意味に気づいた人と少々勘違いした人に区分されるだろう。この世代が注目されるのは、インターネットによる「自己表現」「自己承認」である。それは結果的に「経済」との結びつけが協力・強力となり、ある期待をもたらそうとしている。アメリカが中心となっていることに注目すべき！！　トランプ現象！！　フェイクニュース！！　格差！！　消費！！　経済中心！！　アベノミクス効果！！？

著者の数値、現象のみの偏りある評価は気になるが、私と異なる人の意見を聞くのも必要はあり、新たな知識獲得として読んでいる。

私は色々な世界で活躍している２０歳前後の「気づきあるゆとり世代」の若者を評価し、期待する。

「世代論」は、その世代の若者が、冷静に分析し、前向きな要因に「気づき」「発見」し、自分をどのように「構成」「構築」「編集」していったかを論評すべき。

自分への「Architecture」！！の方法論。

本書を読んだ感想は、今的の言葉「ＳＤＧｓ」と、あらゆる「消費」「消費文化」とどのように向き合っていくかが大きな課題となることに気づかされたと言っても良いだろう。そして彼らの世代は「同調調和」！！　君の意見と評価は！！？？

＊＊＊

数年前に読んだ新書の問題提議が、新型コロナウイルスの出現によって現実化、問題化しているのに気づかされた。基礎的な問題、損得関係なく＝経済的にもマイナスであっても、国家として継続し、問題解決を図らなければならない事象等々を先送りにした結果が今日であり、自助を優先し、共に提案されなければならない共助、公助がなく、ただ国民の犠牲を強いている。「自助・共助・公助」は序列ではなく、永遠に続くループ、又は正三角形ではないでしょうか。全ての面で言えることである。

最後まで読んでいただき感謝申し上げます。ありがとう！！

最後の追伸：２０２１．３．１０

常日ごろ、ホームページのＷｅｂ名簿を見るのが楽しみです。君たちにとって小さな情報（住所、勤務先、勤務地変更及び小さな書き込み等々）かもしれないが、私は会えない君たちとの「絆」を感じる。小さな情報「ほう・れん・そう」の大切さを再確認してほしい。小さな積み重ねが大きな宝になる。そんな小さな「結・ゆい・つながり」が建築研究会ＯＢ会だと思います。

共に歩みましょう。

いつか、「普通」に会いましょう。